

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月8日現在

機関番号：12602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25770104

研究課題名(和文)19世紀ヴィクトリア朝文学における「活字」と「音声」の相克

研究課題名(英文)Between Voice and Print: A Study on the Nineteenth-Century Literary Marketplace

研究代表者

猪熊 恵子 (INOKUMA, Keiko)

東京医科歯科大学・教養部・准教授

研究者番号：00508369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の概要は、以下の二点にまとめることができる。

- 1) 研究期間前半を通して取り組んだ翻訳書籍『集英社ポケットマスターピースシリーズ：ディケンズ』においては、ディケンズの初期・中期・後期の代表的作品から各々読みどころを抜粋し、一冊の文庫書籍としてまとめることにより、一般読者にも親しみやすい形で、19世紀作家ディケンズの語りの音声の特徴および経年的推移を明らかにした。
- 2) 研究期間後半を通して取り組んだ博士論文では、19世紀の活字文化の隆盛とディケンズの小説内の語りの音声と比較検討し、ディケンズという作家の語りに宿る印刷文化への両義性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project investigated the early- and mid-period novels of Charles Dickens (1812-70), focusing on their narrative techniques that foreground complex intersections of voice and text. The chief aim was to explore his ambivalence within the broader context of 19th-century publishing market, as technological innovations contributed to produce a mass market of literature, and as people's voices were transformed and standardised into print. My research made clear how Dickens utilised these changes to establish himself as a successful novelist, yet at the same time how he tried to preserve his own authentic voice, away from such cultural commodification.

研究分野：イギリス19世紀小説

キーワード：ディケンズ 語り 音声 活字文化

1. 研究開始当初の背景

19世紀ヴィクトリア朝文学における「活字」と「音声」の相克に焦点を当てようと考えた。その背景としては、印刷技術の進歩などにより、当時の繁栄を象徴するシンボルとなった「活字」が、前時代的でノスタルジックな事物としての「音声」と、同時代小説の語りの中なかでどのように交錯するかを研究したいと考えたためである。あわせて、当時の技術革新、社会制度改革などを概観しながら、ヴィクトリア朝的進歩史観の光と闇が、活字/音声の軸とどのようにオーヴァーラップしているかを分析するという目標を設定した。

2. 研究の目的

本研究には、大きく分けて以下の二つの目的があった。

(1) まず第一の目的は、19世紀の産業革命の波の中で大きく変容した書籍の在り方およびその受容の形態を詳細に確認することであった。産業革命による技術革新により、書籍を製作するための紙の供給スピードは大幅に上がり、印刷技術の進歩にも目を見張るものがあった。前時代に比べ、素早く、大量に、安価に製作された書籍は、新たに登場した鉄道網に乗ってイギリス全土の読者のもとに運ばれることになった。こうした書籍を取り巻く大きな環境の変化を、まずは当時の歴史資料等をもとに綿密に跡付けていくことが、第一の目的であった。

(2) 第二の目的としては、そうして書籍を「外側」から取り囲んだ環境/技術の変容が、書籍の「内側」にどのような影響を及ぼしたのか、ということをはっきりとすることであった。鉄道網の整備、書籍の大量生産によって、読者層が爆発的に増加し、その受容の在り方も大幅に変化・多様化していくなかで(中産階級が自宅で本を読むというのではなく、鉄道車両の中で移動時間に本を読む形態が増加する等)、19世紀の作家たちは、自分たちの語りの手法をどのように変容させていったのかを分析したいと考えた。

3. 研究の方法

上記の研究の背景および目的を鑑みたうえで、まずは19世紀を代表する人気作家であるチャールズ・ディケンズを主たる研究対象として決めた。また彼の長編作品のなかでも、特に創作活動前期から中期(1836年から1850年)に焦点を絞り、その作品中における語り手の「音声」と「活字媒体」との交錯を分析した。

ディケンズという作家を選択した理由は以下の通りである。時代の寵児として、印刷技術の繁栄や拡大する読者層を取り込みな

がら、独自の語りのスタイルを確立したディケンズは一般に、「活字文化の申し子」として捉えられることが多い。しかしながら、実際の彼の作品内部には、多くの音声文化へのノスタルジアが存在し、活字文化以前に回帰しようとする、懐古的な傾きが垣間見える。こうしたディケンズのありかたに注目することにより、一般的に流布する「大衆を愛し、大衆に愛された作家ディケンズ」というイメージを再考した。当然これは、既存の「ディケンズ観」に修正を加えることを意味する。ディケンズは、そのユーモラスなキャラクター造形や都市の生活を描き出す鮮やかな筆致を高く評価される一方で、さまざまな「声」が規則性を欠いた形で横溢するとして、その「即興性」に批判が向けられることも少なくない。しかし、彼の作品内に見られる「音声」や「活字」の複雑な交錯を読み解けば、そこに見えてくるのは、無統制でポリフォニックな「音」の海ではなく、むしろきちんと構造化された「声」であることがわかる。その構造化されたテキストの内部で、語り手は、数を増していく大衆読者の目を避け、自分の親しい読者/聴衆だけを抱き込むような、閉鎖的な語りの聖域を構築している。この点を論証し、ディケンズの即興性への批判を再考し、また「大衆作家」としての彼のジレンマを新たな側面から読み解いた。

また、彼の製作年代の前期と中期に焦点化した理由は以下の通りである。ディケンズが小説を発表し始めた1836年は、ちょうどヴィクトリア朝開始とほぼ同時期であり、技術革新が社会のさまざまな枠組みを変容させはじめた黎明期であった。最初の鉄道線路の敷設が同時期であったことから、この点は確かめられる。またディケンズが始めた小説の分冊形式での出版は当時の読者層形成に大きな影響を与えている。これらの点を鑑みれば、ディケンズの前期・中期作品は、ヴィクトリア朝期の技術革新による書籍媒体の変容を、内側と外側から規定し/されるものであることがわかる。とはつまり、ディケンズの作品出版によって書籍媒体の在り方が変化を促される側面と、変わり続けて行く社会の波の中で、ディケンズがもっとも時代精神にあった小説出版の形式/語りのありようを模索する側面とが、双方向に展開していた、ということである。この点を確認したうえで、本研究はディケンズという作家の上に交錯する二つのベクトル(個人としてのチャールズ・ディケンズ(時流にうまく乗りながらも、前時代への懐古的傾きを消化しきれない両義性)と、社会現象としてのチャールズ・ディケンズ(その両義性を宿した作品を、19世紀の文学マーケットに供給することで、当時の書籍出版の革命的变化を刺激しつつ、作品内部の音声によって、読者たちの読書行為の内部にも前時代的物語消費の在り方を再現する)に照射した。

こうした研究手法によって、本研究の目的

として設定した 19 世紀書籍製作の背景と、書籍内部の活字 / 音声の交錯を読み解くことができたことと自負する。以下に実際の研究成果について詳細に述べる。

4. 研究成果

本研究の研究成果は大きく分けて二つある。

(1) 研究計画の第一段階として、ディケンズの語り手としての「音声」 / 「活字」の使用法を読み解くため、ディケンズの語り手が製作年代を通じてどのように変化していくのかに注目した。この成果を、研究者のみならず一般読者にもわかりやすい形で提示する大きなプロジェクトとして、『ポケット・マスターピース』シリーズのディケンズ巻の翻訳に取り組んだ。この『ポケット・マスターピース』はディケンズの初期の傑作『骨董屋』、中期の代表作『デイヴィッド・コッパフィールド』、晩年最後の完成作品『我が共通の友』からそれぞれ読みどころを抜粋し、三冊合わせて 800 ページ程度の文庫本として編んだものであり、ディケンズの年譜、文献解題、および芥川賞作家辻原昇氏による解説などを付し、2016 年 2 月に出版された。

この『ポケット・マスターピース』を通して得られた収穫は、以下の通りである。初期の『骨董屋』では、若き日のディケンズが老人のペルソナをまとうて語り、中期の『デイヴィッド・コッパフィールド』では壮年期のディケンズが、自伝的に自己の来歴を振り返る構成を取っている。そして晩年の『我が共通の友』では、三人称の全知の語り手の視点から物語が語られる。これらの作品群を少しずつ翻訳しながら、ディケンズの語りにもみられる「音声」と「文字言語」との対立や対比を細かく分析していくことができた。(主要業績欄を参照)

(2) 上記の翻訳作業を終了したのち、ディケンズの「音声」と「文字」の交錯に関する研究を、単に作家個人の変化のみならず、19 世紀の歴史的背景と合わせて包括的に論じるべく、博士論文の完成に注力した。翻訳作業と並行して、大半の章を書き終え、最終年度にかけて推敲を重ね、平成 29 年 8 月に東京大学大学院人文社会系研究科に博士論文として提出した。その後、平成 30 年 1 月に最終口頭試問を受け、同年 3 月に博士号を授与された。この博士論文における研究概要および成果については以下の通りである。

博士論文は全体で八章からなる。第一章ではヴィクトリア朝期の社会 / 歴史的コンテクストを、当時の一次資料から跡付け、読者数の爆発的増加と、その読書形態の多様化とを、歴史的文化的データから明確にした。

第二章はディケンズの初期作品を代表する *Pickwick Papers* (1836-37) を取り上げ、その

語りの手法に焦点を絞り、ディケンズがいかにして音声的な読書行為を先取りして自らのテキスト内に取り込んでいるのかを明らかにした。この分析のため、研究史のなかでは低評価に甘んじることの多い「九つの挿話」を取り上げ、精緻にテキスト分析を行った。

第三章は *Master Humphrey's Clock* (1840-41) および *The Old Curiosity Shop* (1840-41) を取り上げ、研究史のなかでは「過剰なセンチメンタリズム」と「無計画な即興的構成」を批判されることの多いこれらの作品を、語り手の「声」および「身体性」というキーワードから再考し、両作品が単に場当たりに書かれたセンチメンタルな作品ではなく、自覚的に当時の読者の作品消費形態を内面化したものであることを論証した。

第四章は、ヴィクトリア朝作家と当時の文学消費マーケットの間の緊張関係を明らかにすべく、19 世紀中盤のコピーライトについて、法律的資料や当時の他の作家のエピソードを検討し、作家が自らの「音声」を、大量生産可能な「活字」化するプロセスに伴うジレンマを浮き彫りにした。

第五章および第六章では、ディケンズのアメリカ紀行文である *American Notes for General Circulation* (1842) および、その体験をフィクション化した要素の濃い *Martin Chuzzlewit* (1843-44) を取り上げ、ディケンズ自身のコピーライトを巡るさまざまな葛藤がどのような形で文字化されているか / あえて隠匿されているかについて、詳細に検討した。

こうして、ディケンズが自らの「声」の権利化についてどのような意識を抱いていたのかを、歴史的文化的背景から明らかにしたうえで、第七章および最終章では、ディケンズの自伝的試み(自らの声を自らテキストとして編み込む)に焦点を当て、彼のテキスト上での語り手の音声言語と文字言語とが、通り一遍の関係性で処理できるものではなく、常に不安定に進歩と後退のあいだを揺れ動くものであること、そしてそれが、ヴィクトリア朝の文学マーケットの中で書いたディケンズ自身の不安定な立ち位置を暗示的に示すものであることを論証した。

以上二点を、本研究プロジェクトの主たる業績 / 成果として報告する。その他のものも含めた一覧は以下の 5 に述べる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

猪熊恵子、審査 / 査読あり、博士学位論文
“Between Voice and Text: The Techniques of

Narration in Charles Dickens's Early- and Middle-Period Novels (1837-50)"
東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究英語英米文学専修博士課程
博士学位論文 (pp.1-238)
2018年2月博士号授与

猪熊恵子、査読なし、書評
Daphne Du Maurier, *The Infernal World of Branwell Brontë* (New York: Virago, 2006) 日本ブロンテ協会 『ブロンテ・スタディーズ』第6巻第2号 pp. 78-83.
2017年12月

猪熊恵子、査読なし、紀要論文
東京医科歯科大学教養部研究紀要 第四十六号 「David Copperfieldの複層的な「声」を読む」 pp. 23-34. 2016年3月

猪熊恵子、査読なし、書評
書評の饗宴: Juliet Barker, *The Brontës: Wild Genius on the Moors*. 日本ブロンテ協会 『ブロンテ・スタディーズ』第6巻第1号 pp. 75-81. 2015年12月

猪熊恵子、査読なし、書評
『エリザベス・ギヤスケル中・短編小説研究』日本ギヤスケル協会 『ギヤスケル論集』第26号 pp. 95-100.
2015年8月

猪熊恵子、査読なし、コラム
Brontë Newsletter of Japan, Number 87, p. 4.
Brontë Triangle 「非リア王」としてのパトリック・ブロンテ 2013年10月

猪熊恵子、査読なし、書評
Studies in Victorian Culture, 11 巻, pp. 72 - 76.
Kate Thomas, *Postal Pleasures: Sex, Scandal and Victorian Letters*. 2013年9月

〔学会発表〕(計1件)

猪熊恵子、個人発表
2015年10月10日
日本ディケンズ・フェロウシップ
秋季総会(於日本大学 千代田キャンパス) 研究発表: 「読み書きの難しさ
David Copperfield を読む」

〔図書〕(計2件)

内田能嗣、海老根宏監修、猪熊恵子(分担翻訳) 『歴史のなかのブロンテ』マリアン・トールマレン編、大阪教育図書
第三十九章 ビルギッタ・ベルイルンド著
「衣服」担当 (pp. 394-406)

2017年2月

猪熊恵子、単独翻訳
『ディケンズ』ポケット・マスターピース
第五巻 辻原登編、集英社文庫デイヴィッド・コッパフィールド(抄)、骨董屋(抄)、
我らが共通の友(抄)(pp.7-780)
作品解題、著作目録、主要文献案内、年譜
(pp. 800-842)
2016年2月

〔産業財産権〕
該当なし

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等
該当なし

6. 研究組織
本研究は個人研究であるため、他の研究者および研究組織との連携は行っていない。

(1) 研究代表者
猪熊 恵子 (INOKUMA, Keiko)
東京医科歯科大学
教養部英語分野・准教授
研究者番号: 00508369